て爪尖の横死を遂ぐると一般ぢや。漢書に舊鶩は山を卑しと爲して巣を其上に增し、鼈掘魚鼈は淵を淺しと爲して穴を其中に穿ち、卒に其得らる者は餌なりとある、利を貪るものは必ず害に逢ふ。

互に爭論の折節忽然として翼を鼓し一疋の虫飛來て云、我は夏國に住蚊といふもの也。汝ら何をか爭ふや。それ天地造化の理微なりといへども胎卵濕化の四生を過ず、蚤は埃より生じて埃に住、虱は垢より生じて垢の中に住、偕に相並んで人を血食せり。蚤は其性壯强にして翼なくして飛かゝるの妙術を得たるゆへ、人に殺るゝ事すくなけれども子を產孫を生ずる事もすくなし。又蝨は其性柔弱にして飛かゝるの術を得ざる故害に逢事多しといへども。縫目襤褸の中に子々孫々繁茂すると蚤よりは百倍なり。

天下の物は必ず一長一短がある、而して其長短を相殺すれば一として均一ならざるはない。條虫の如きは其生活法極めて困難であるから天は之に何百萬の卵を一時に產せしめ、人は生活法比較的簡短なれば天は人をして一時に三人以上の子を產ましめぬ。造化の妙はこゝにあるのぢや。

エピキュラスが言ふた如く、小を以て滿足せざるものは何事を以てするも滿足するとはできぬ。之に反して若し其分に安んずれば、同人の言の如く、「吾にパンと水とだにあらば幸福に於て天帝に讓らず」である。

胎卵濕化とは胎生は人間の如く、卵生は鳥の如く、濕生は蚊の如く、化生は無の中より忽然生ずるのぢや。起世經に說いてある。

我は濕濕の子子の變化なり、蚊するどく翼あつて飛行自在を得たるゆへ、汝らが如くめつたに人に制せられず。去ながら世の諺にも蚤の四月、蚊の五月、三月の花見虱は其時の盛なるを稱する詞なれども、汝らは四季にあつて壽命永し、我はたゞ夏秋をのみしつて春冬をしらず、我は其短命を歎也、汝らに我蚊と翼とをあたへば人に制せらるゝ事少く今の爭ひも起るまじ、我亦汝らが如く四季を送る壽命を得ば十分の喜びなれども世の中のならひ必ず富貴なる人の短命貧賤なる人の長命、これを均ふすれば皆十分ならざる也、世間の事のみに非ず、天は西北に足ず地は東南に滿ずといへば天地すら尙十分ならざる也。

現在の我々が境涯は不足とはいひながら。皆偶然ではない必ず由て來る所があるのぢや。大集經の月藏分には之を說明して十來てふことを擧げて、

正者忍辱中來　權貴者善根中來
高性者禮拜中來　卑賤者憍慢中來
瘖瘂者誹謗中來　盲聾者不信中來
長壽者慈悲中來　短命者殺生中來
諸根不具者破戒中來　六根具足者持戒中來

とある。斯く吾人の境涯は自業自得なれば不足なる世に滿足するが最上である。武田信玄が戰爭に就て、「軍勝五分を以て上と爲し、七分を以て中と爲し、十分を以て下となす。五分は勵みを生じ、七分は怠を生じ、十分は驕を生ず」というたのは人事百般に應用することができる。秦の始皇、漢の武帝の如きは十分の上に十分を求めて不老不死の藥まで得んとした、これ人間の愚なる絕好の標本ぢや。「岳陽に酒告山あり、相傳て云、古來仙酒あり、飲めば死せずと。漢の武帝之を得て大いに喜ぶ、帝未だ

飲まざるに東方朔先づ之を盜み飲む。帝大いに怒り之を殺さんとす。東方朔平然として曰く、已に仙酒を飲む、殺さんとし給ふとも臣死せず、若し臣死せば其酒驗なきなり、盜み飲むとも何かあらん」とある

潺湲(せゝなぎ)とはどぶのとぢや。

天は西北云云とは淮南子に、昔者共工與顓頊爭爲帝、怒而觸不周之山、天柱折、地維絕、天傾西北、故日月星辰移焉。地不滿東南、故水潦塵埃歸焉とある。

物の十分を願ふは足事をしらざる心病なり。汝ら互に相貪て厭足事を知らざるによつて血食の地を爭ふにいたれり。それ人の食を食するものは難に死するは常の道也。汝らも人を血食するによつて人の爪尖に死す、其人を血食する虫と生れ出るは汝らが自然の性也。何れの所に於て何者にか其罪を咎むべけんや。汝らよく理會すべしとぶう〳〵いふて飛されり。

人を食ふの蝨は人に殺され、人を守るの犬は人に飼はれ、米を食ふ虫は米と共に炊かれ、酒を飲む人は酒に飲まれ、年をとる人は年に命をとら

れる。

年々にとしをとるとは思へども
としに命をとられぬるかな

ぢや。されば

唐虞日華々以致於王、桀紂日快々以致於死

逆つて入る物は逆つて出、頓に得る物は頓に失ふ。一日作さざれば一日食はず。さすれば齷齪として利名に勞せんよりは從容として道に遊ぶには如かぬ。莊子に云ふ、

顏回曰回益矣仲尼曰何謂也、曰回忘仁義矣曰可矣猶未也。它日復見曰、回益矣、曰何謂也、曰回忘禮樂矣、曰可矣、猶未也。它日復見曰回益矣、曰何謂也、曰回坐忘矣。仲尼蹙然曰何謂坐忘、顏回曰墮枝體黜聰明離形去知同於大通此謂坐忘。

仁義を愛すれば不仁不義我心を亂し、禮樂を好めば無禮無樂我心を亂す、如かず之を忘れんには。更に四肢五體を忘れ、知を棄て形を離れて三世

常住なる靈心に合して、絶對無礙なる涅槃の境に遊ぶ、これ即ち坐忘である。仁義禮樂四肢五體すら猶ほ忘るべし況や利名をや。金剛經に

法すら捨つべし況や非法をや

と說き給へるはこゝぢや。

浮世莊子講話 終

附錄田舍莊子

莊子大意

林希逸が云。莊子を見るものは。別に一隻眼をそなへてみるべし。語孟の文字を以。此書をみるとなかれといへり。其論常に一層一層よりも高く。理の至極をいひつめて無爲自然に至てやむ。その意におもへらく道は言語を以て盡すべからず故にをのれがいふ所も亦道の盡る所にあらずとおもへり是れ莊子が狂見の廣大なる所也。世を矯俗の眠りを惺さむがために常に過當の論おほし。或は五帝三王周公孔子を毀りて。當世の儒者。聖人の眞を不知。徒に其禮樂仁義の迹になづみ。聖人の糟粕を貴むで道とするとを憤り。禮樂仁義聖人ともに打やぶりて。道の極りなき事を論ず。莊子。實に聖人を不知にはあらず。堯舜孔子を毀るは。實に堯舜孔子を貴ぶ也。今の儒者の貴ぶ所は堯舜孔子の迹なり。其形迹の堯舜孔子を打やぶりて。其の堯舜孔子をあらはさむため也。末の天下の篇において。莊子が實の見處を觀べし。只東坡のみ。莊子が實に孔子を貴ぶとをしれり故に又莊子孔子

を假りて。をのれが言の證とする所多し。且つぃふ所の至當の論は。他の賢者の及ぶ所にあらず。或は怪異の戯論をいふとは這裏に至理を寓す。物を假りて人の耳に入やすく。人の眠を惺さむことを欲してなり。佛の方便とは意味少しく異也。莊子は造化を以て。大宗師とし。大父母とす。死生禍福。動靜。語默。只大父母に任せて。其命に安むじ。一毫も其間に意を容るゝ事なく。是莊子が主意也。僅に意を容るゝ時は。迹有り迹ある者は。かならず對あり。此に善なれば彼に惡なり。譬へば陰陽水火のごとく用をなす時は善也。物を害する時は惡なり。萬物形迹ある物みなかくのごとし。風雷雲雨の類も又然り。天地の大なるも形あれば器也。人猶憾る所あり。只道は迹なし。故に對なし善惡を以て語るべからず。古今を以て損益すべからず。始もなく終もなし。前後もなく左右もなし。人の由よつて須臾も不可離所に就て强て名付て道といふのみ。莊子がいふ所は伏羲先天の理也。聖人此理を不知にはあらず故に經に云易無思無爲寂然不動感而遂通於天下之故と云へり唯聖人のおしへは。道を以器を制し。器を以て道を載せ道器

兼備へて遺すとなし。廣大を致して精微を盡し。高明を極めて。中庸による。百姓日々に用て。其然る所以をしらず。莊子は狂見にして。道の廣大高明を見る。聖人精微中庸の道を超脫して無爲の化に遊ぶ。當世の儒者仁義禮樂に醉て道の眞を失へりとおもへり。故に仁義禮樂の名をやぶつて。俗の眠をさます。仁義をやぶるにはあらず。聖人自然の天德を人にしらしめんが渾然として。名付べきものにあらず。夫仁義は人心自然の天德なり。ために。其發見の所に付く。暫く名を揭げ出してしめし給ふのみ。禮樂は其天德の自然に隨て制し給ふのみ也。中庸に曰。文武之政布在方策其人存則其政舉。其人亡則其政息。又曰禮儀三百威儀三千待其人而後行。苟不至德至道不凝是によつてみれば眞を得ざる時は。禮樂刑政も糟粕のみ莊子が論ずる所の仁義は仁義の迹也。莊子を讀む者徒に其高遠を悅び其荒唐の說になづみ。其過論を眞とせば。莊子の本旨を失ふのみならず大道を誤り。浮世に莊子出て又莊子を破せん。只聖學の大意を知て後莊子を讀まば大に執滯の情を解き心術に益あらん。

禪家に。佛を呵し。祖を罵といふも。莊子の氣象に似たり。近く人の知る所にていはゞ。一休の歌に

釋迦といふいたづら者が世に出て
おほくの人を迷はするかな

世間の高僧知識といふもの。皆經論の糟粕に醉て。妄想の釋迦を信じ眞の釋迦をしらず。高僧知識の信ずる釋迦は衆生を迷はし。地獄へおとすいたづらもの也。是をうちやぶりて。誠の釋迦をあらはさむため也。おなじく一人の釋迦なり。經論になづみ。迷て信ずる時は釋迦も妄想佛なり。世界の邪魔なり。雲門の一棒に打殺して。狗子に喰はしめんといふも是なり。自性を信じて。佛心を悟る時は暫くの師なり。此釋迦は我が心に求るのみ外に向つて。佛を求る者は愚の至り。迷の甚しき也。むかし維摩詰。阿難を呵して云汝が師は六種の外道なり。汝師に隨て地獄におつべしと阿難。經說に醉て佛心をしらず。故に釋迦ともに打やぶりて阿難が夢をさまさんと欲るのみ。

或曰。莊子は禪にちかしと。しからず。其氣象は似たる所あり。其大本は。異なり。佛氏は三世を說てやまず。造化を以て幻妄とす。莊子は三世を語らず。造化を以て。大宗師とす。千里の差なり。莊子は聖門の別流也。孔子曰不得中行而與之必也狂狷乎狂者進取狷者有所不爲也。しらぬ人の申せばとて用ひたまふべからず。

禪は高遠を談ずといへども直に語つて其言曉しやすし。莊子は希世の文筆。その妙。龍の變化して見難きがごとし其無端崖の言に醉時は又莊子がために弄せられむのみ。

莊子大意終

無妄想時一心是一佛國、有妄想時一心是一地獄若不以心生心則心々入空、念々歸靜、從一佛國至一佛國若以心生心則心々不靜、念々歸動從一地獄歷一地獄

田舍莊子卷上

東住士　佚齋樗山妄選

雀蝶變化

雀蝶に謂て云。汝の俗性をみれば菜虫也。汝むかしは畠にまろび。自由にかけまはる事もならず。やう〳〵菜の葉にとり付て蠢々としてありつらん。今化して蝶となり。花をたづね。香を追ひ。飛行自在の身となりぬ。むかしに比すれば。其樂いくばくぞや。今我小鳥なりといへども。翅あり足ありて。心のまゝにとびありく。然るに我れ九月は。海水に入りて。蛤になるといふ風聞あり。彼蛤を見るに。目鼻もなく。手足もなし。甲をかぶりて。おり〳〵舌を出せども。何を喰と云ともしらず。極寒にも。水中に轉びまはり沙に埋れ居るばかり也。我かゝる身になりたらばいかゝはせん。なまじゐに生れながらの蛤ならば。此はづの事とおもひ居るべけれども。一たび雀に生を受。山林の樂みを極めたる身の亦變化して水中の艱苦をのし

き潮の大小に隨て瘠つ肥つするならば。いかばかり昔てひしく迷惑ならむと。今より此事おもはれて歎きかなしむのみ。汝はいかなる善果ありてか。菜虫より立身してかゝる自由の身とはなる。我はいかなる。惡因ありてか。飛鳥より下落していな物になる事よとなみだをながせば。蝶聞て云歎く事なかれ汝が下落にもあらず。我が立身にもあらず。夫氣あつまりて物となり。變化して形を易。我何の心かあらんや。菜虫より化して。蝶となるといへども。其時いかやうにして變化したる事をおぼへず。まして菜虫の時の事は絶て忘れたり。今おもへば。定て其時は菜虫相應に。くらしたるなるべし。むかし莊子夢に蝶となりて飛ありく。莊子夢中に蝶の心になりて我はもと人なりと云事をしらず。夢さめて後はもとの莊子也。却而云莊子夢に蝶と成たるか。今又蝶が夢に莊子と成たる歟と。變化の理。亦かくのごとし。汝九月變化して。蛤になる時は天氣自然に動也。おぼへず海に入なるべし。此時に至て。何の心かあらんや。おもふに醉て眠るがごとく成べし。既に蛤になりて後は。今の雀の心は絶てなくなり。そのづから蛤の

心になりて。極寒にも水中を家として寒き事なく。轉びまはりて。相應に世をわたるならむ。形變ずれば心氣ともに變ずるは理の常也。理は形象なく。氣中に存す。既に雀の形あり。雀の氣あれば。雀の理存ず。又蛤の形あり。蛤の氣ある時は蛤の理存す。形の心は無形に從ふもの也。形滅する時は此の形の心なし。むかし老夫あり。臨終に及びて。旦那坊主來りて念佛をすゝめければ。老夫眼をひらき。萬物無より生じて無に歸す。何ぞ輪廻流轉するとあらんやと云。坊主の云萬一ありたる時はいかゞし給はん。唯理をまげて。念佛を申給へと。老夫頭を掉てたとひ生れかはるといふとありとも。さして苦にもならず。御坊は。母の胎中に在りし時の事を覺へ給ふか。生るゝ時はいかやうの心持にして有しぞ。語り給へと云。坊主腹を立。誰か一人是を覺へたる者あらん。其方は覺へ給ふかといふ。老夫云我も覺へず。しかく生るゝ時の事をさへ。覺へたるものなく。まして遠き前生の事。誰か覺へたる者あらんや。しからば此後又何に生れたり共。今の心は絶てなくなり。蟻になりとも。鼠になりとも。其生れたる物の心に

なりて。相應に慕すべし。一生を夢のごとしとの給ふ。來世も又一生なり。是も亦夢のごとくにてぞあらん。然らば。生を隔てゝしれぬ事を。今より苦勞にするも。愚痴也只死ぬるとおもひて。死ぬるが。當下一念ならん。是即成佛也といへば。坊主言ばなくして退ぬ。今薯蕷變化して。うなぎとなり。腐草化けて螢となる。試に鰻と螢とに向て問へ。何ぞ薯蕷と腐草の心をしらんや。薯蕷腐草。又何の業報かあらんや。陰陽のあつまつて形をなし。其氣此形の肉を運て。動止語默の用をなす。生氣盡て形を離る是を死といふ此形死して後は。生氣盡ぬ。何によつてか。此心滅らんや。火の熾なるも。薪につきて燃る也。薪盡る時は。火をのづから滅す。餘煙有といへども。久しき事能はず。此火滅すといへども。又金石の中より出て。火猶傳はる。既に滅する火。又金石の中へかくるゝにはあらず。汝默識すべし。言說の盡す所にあらず。

木兎自得

鷹鴞に謂て云。汝を見るに。其形おかしげにして。丸きつらにちいさき觜あり。頭巾鈴懸を着せたらんには。小人島の天狗なりと云つべし。大きなる眼有ながら。豈はあきめくらにして。日輪をさへ見付得ずうろ〳〵として諸鳥のために笑はれ。夜はやぶのうちにかゞみ。居寢とぼけたる小鳥をとりて喰ふのみ。づくまはしの手にわたり。撞木につながれ。糸を付ており〳〵ひかるゝ時はばた〳〵と。うちつく體。諸鳥のわらひもことわり也。なまじゐに汝も。四十八鷹の內なれば。嘸口おしく思ふらん。我汝がために。汗を流すといふ。鴞頭をふり。觜をならして云。鷹殿大なる御了簡ちがひ也。天地の間には空をとぶものあり。木に棲むものあり。地を走るものあり。水におよぐものあり。美しきものあり。醜きものあり。皆それぞれに。造物者の命を受て。生れ來るものなり。自分〳〵の物ずきにて如斯なるにはあらず。萬自分の好みにて。自由になる事ならば。誰か一人不自由なる形を受るものあらんや。我がおかしげなる姿にて。晝眼のみへぬは天性也。造化のなす所。豈私を以まぬかるゝ事を得むや。其上うなかうじ

は糞中を家とし。蠙は。はきだめの中に住居す。彼等は此を以て宮殿樓閣とおもふらん。蚍には足なく。蚓には目鼻もなし。去ども皆相應に用たるとみへたり。造化の物を生ずる。皆それ〳〵に。食と居所とを。授く迷惑せぬ程に。うみ付らるゝ也。分を越て。他をうらやむは天にそむく也。我甚は。眼見へずといへども夜に入りては用の足る程は見ゆる也。故に藪の內をさがして。相應の餌を求む。亦餓死に及ぶ程の事もなし。小鳥どもの我を笑ふは。我形のおかしき物ならんとおもへば。さのみ腹たつほどの事もなし。彼等何ほど笑ひたればとて。我がじやまにもならず。わらはれて居るまで也。我鳶烏のごとく。人家に害をなす事もなく。雁鴨のごとく人に賞味せらるゝものにもあらねば。さがし求めて。我をとらゆる者もなし。たま〳〵。づくまはしの人。我をとらへて。擅木につなぎ。小鳥共に見せてわらはするも。我に意趣有。われをにくみて。するにもあらず。又意地わるく。いたづらに如斯するにも非ず。小鳥をあつめてとらんため也。是亦世につらなる不肖なれば是非なし。其かはりには。鼠にても殺して。我

に喰はすれば。我骨おらずして。食につく也。さて。いらぬ時には。暇をくれ追はなしてやらるゝ迄也。御身は生れ付氣高く身持も奇麗に。威儀そなはりたる鳥なり。大名高家の擧に上り。諸人の馳走も他に異なり。然れども野に出て。鳥を捉の苦勞は我よりも甚し。捉へても全く我が物にもならず。大鳥に出合ては。やゝもすればたゝきおとされ。不功者なる鷹匠の擧にては。おもひよらず。胸をつき。非業の死をせらるゝ事もあり。足革を付られて。とやにつながるゝ事は。我もおなじ事也。此に一本の木あらんに伐て。半分は香盆に作られ。蒔繪金具結構に飾りて床の上に置。貴人高位の翫美となり。其半分は木履に作られ。泥の中へふみこまるゝ。其形をみれば尊卑各別なれども木の生を伐らるゝとはおなじ。ちやうげん坊といふ鳥あり。鵰を憐れみて云。汝をみるに。其形うるはしとはいふべからず。然れども。頭あり。尾有。翅あり。足有。耳鼻背有。鳥の全體備つて。かたは物とはいふべからず。甚は眼みへずといへども。夜は蚤をとる程の明あり。おほく鳥類をみるに鳶のばさけて。虱多き。へら鷺の背諸鳥に類

せずして。しかも其形汝よりも無調法也。鶉には尾なく。諸鳥是等を不笑して。汝のみをわらふ。汝其形醜く。其心拙くして。四十八鷹の部に入たる故に。諸鳥嫉で汝をわらふか。且前生の宿因か。抑當時の不幸といふもの歟。いか樣不便なる事也。鵶が云。我其故を知らず。然ども。其實有て。人是に名を與ぬと。老子もいはれたり。然らば我におかしき事有て小鳥の笑ふとみへたり。我是をいとふべき事にもあらず。四十八鷹の部に入といふとも。我好みて成りたるにもあらず。小鳥とても。捕て喰ふ故に。人鷹の名を付たるなるべし。しゐて我辭すべきほどの事にてもなし。我れわらはれて人のためになるは鵶の職分也。我をとらゆる者は我を養ふ也。人に養はるゝものは。をのづから其つとめあり我亦少しく。恩を報ずる事なからんや。

蚿蛆疑問

蛆蚿に問て云。我百足を用ひてゆけども。猶早き事能はず。人に追るゝ時。

は翅もがなとおもふ時あり。汝をみれば。足もなくして。のたりゆく。嘸事たらずして。不自由ならん。何の術を以か。足もなくして如此のたりあるくや。蛆が云。我何の術をか知らんや。只こゝろのむかふ所へ。頭をさしむかふれば。身は隨てゆく迄なり。汝をみるに。おほくの足を動かしてゆく。嘸事おほくして。心せはしからむ。何の術を以か。かくのごとくおほくの足を。まぎれぬやうにはこびゆくや。蚿が云。我ひとつ〳〵に心有て。おほくの足をつかふにはあらず。一機動く所。即百足動く。身をのせてゆく。更に心せはしき事なし。別に何の術をか用むといふ。蚓傍に在て。歎じて云。夫人々我が得たる所には。明らかなれども。これを推して彼を知ると能はず。四書六經を講する者。其廣大高明の理。皆我が心の註解なるとをしらず。故に書をはなれて。心を解くと能はず。只見覺へたる。文字の訓詁をいふのみ。況んや無心。無形造化と出入するとをしらむや。蚿の足おほきも。蛆の足なきも。共に造化のなす所にして。我もしらざる所也。故に蚿足おほきとても。苦勞にもせず。蛆も足なきとても不自由なり

ともおもはず。今彼等作爲して。羽虫の翅をとりて。身に着たらんには。飛事の叶はざるのみならず。じやまにて歩行もなるまじ。鶴の脛の長きと龜の足の短きとは。共に性也。長過たりとて。鶴の脛をよきほどに切たらば。痛みて死なむ。短しとて龜の足を。能ほどに繼きたらば。苦しむでしばらく立となるまじ。是。足の恰好はよくしても。其自然に任せざれば。其用をなすと能はず。大凡人。其器の用あるとを知て其用の自然にもとづく事をしらず。みづからなす事を知て。もと造化より。是をなさしむるとしらず。故に私智才覺を用て。日々に造化の神理に違ふのみ。夫木に棲ものあり。水に游ぐ者あり。野に臥すものあり。穴に住むものあり。犬と猿と同じく四足あり。猿は木に上り。犬は上ると能はず。馬は重きを負ふて遠きにゆけ共。猫のごとく鼠をとる事能はず。皆をのれ〳〵が才覺にて如斯なるにはあらず。天より受る所の性也。蚿と蛐と。性異にして。形も亦異なり。蚿は既に足あり。蛐の足なくしてのたりあるくの術を。しらずとも事かけず。蛐には足なし。蚿の百足をつかふ術を聞ても可用所なし。我

も亦手もなし。目鼻もなし。何れ頭やらん何れか尻やらん。我身ながら我もしらず。今迄しらねども。事足りぬ。此はづの事にてこそあらめとおもへばしゐて知らん事を求めず。おり〳〵歌を唄へども。何ぶしといふて。習ひたる事もなし。上槁壤を喰ひ下黄泉を飲みて。世に求めなし、自然鶏に見付らるれば。それ迄の天命也。生あれば死あり。我何ぞ恐れんや。彭祖が八百歳も。七夜の内死したる赤子も。其死したる日よりみれば。おなじ事也。惣じて死生のみにかぎらず。をのれ福のみ有て。禍なからん事をおもふは愚也。陰陽生殺の氣は。皆天道の流行也。吾も亦天地の内の一物のみ。造化の中に生じて。造化の内榮枯消す。吉凶禍福は造化の命也。造化のなす所。豈私を以まぬかるゝ事を得むや。只造化者に身を任せて。此間に私意を容るゝ事なき者。是を道の大意を知るといふ。

鷗蜉論道

龜鶴相祝して汀に遊ぶ。蜉蝣傍にありて嘆じて曰。大なるかな一元の氣。

運轉して造化の窮りなきとや。萬物其間に生々して。成るとは。敗るゝ事あり。榮る事は。おとろふる事あり。異る物あり。同じきもの有。飛ぶもの有。游もの。動くもの。靜なるもの。色々さま〳〵。をのがいとなみをなす。皆自然の妙也。其始はいづかたより來るといふともみへず。此はてはどこへゆきて。何になるといふともしれず。我も亦。萬物の數につらなりて。造化の中に遊ぶもの也。物々よりして是を見れば。蚤。虱。我等ごとき微物といへども。天下をのれより貴きものなし。誰か一人身を以天下にかへんや。又天地よりして是をみれば。大鵬の扶搖に羽うつて。九萬里に上るも。大虛中の一物のみ。況んや。龜鶴の千年萬年の壽といへども。命數盡きて。死する日は我等も同じ事也。我等朝に生れて。夕に死するといへども。我にしては一生を盡すなり。御兩所はいかゞおぼしめすといふ。龜鶴答ふるとなし。海中の浮鷗此言を聞て云。有相の上より論ずれば。世間色々の事あり。本より四大假合して此身となる。忽に來り忽に去る。何ぞ定まる所あらむ。況やうるさき娑婆世界。動けば百苦身に從ひ。千愁心

にあつまる。只風塵を避て。江湖に歸隱し。世の善惡を餘所に見て。閑に生涯を送らんこそ。願はしき事なれと云。蟒蟒が曰。萬物無より生じて無に歸する事は誰も知たる事也。然ども。此形を受て生れ出しより。死するまでの間には。物あれば則ありとて。此形に付ての職分あり。其職に從て其中に遊ぶものを。君子といふ。其職をつとめずして。其形に私する者を。小人といふ。其上嬉しき事。かなしき事。おもしろき事。たのしき事。吉凶。禍福。榮枯。盛衰に至るまで。皆我を生したる造物者といふ。親父のなさしむる所也。汝水にうかびて。閑に暮すも。汝の才覺にあらず。我が命の短きも。我が無養生にもあらず。皆かの親父の差圖也。然れ共かのおやな。豈汝を愛し。我をにくみて如斯ならんや。皆をのれ〳〵が受る所の氣數の自然にして。親父にも心なく。我もしらざる所也。天無心にして施し我無心にして受たる身なれば。又無心にして。造化の中に遊び。無心にして終るべき事也。然るを私智才覺を用ひ。我が勝手によき事ばかりを工夫して。日々おやぢといさかふ。然れどもおやぢのゆるし給はぬ事は。い

たづらに心を勞するのみならず。おもひの外に手ちがひ出來。したゝかなるめにあふ者也。此理にくらき者。たま〳〵巧みにて志あてたる事あれば。是を常と心得て。私智才覺に自滿し。役々として。生涯をくるしむものなり

鴨鷀得失

鴨小鳥共をあつめて謂て云。汝等畑の作物につき。又は庭の菓を喰ふに。いらざる高ごゑをして。友を呼びさわぐによりて。人其來り集るを知て。網をはり。鵜を置く也。我れ冬になり。山に食物なき時は。人家に來りて。緣先にある南天の實を喰へ共。亭主知る事なし。あまりおかしきに立さま。大き成聲をして禮をいふてかへる也。萬一鵜にかゝりても少もさわがず。身をすくめて。そつとあをのけになりてぶらさがり居れば。はごは上に殘り身ばかり下に落る時。よそ〳〵と飛んでゆく也。汝等は鵜にかゝりたる時あはてさはぎ。ばためく故に。惣身に鵜をぬりつけて。動くともならずして。とらへらるゝ。不調法の至り也。と才智がましく語る。末座より。鷦鷯といふ小鳥。笑て云。人は鳥よりもかしこくて。一たび此手にあひたる者は。下にも細きはごを置き例のごとくぶらさがりて。下へ落れば。下なるはごを。せなかに付おもひよらぬ事なれば。さすがの鴨殿もあはて躁ぎ給ふ故に。惣身に鵜をぬりて。とらへらるゝ事は同じ事也。世間小智の人皆斯のごとし。をのれ才覺を用ひて。一旦しあほせたる事あれば。自滿していつも如斯とおもへり。天下の人豈皆愚ならんや。人は其巧を知て重手をうつにより。今迄の才覺の巧。皆いたづらになり。却て仇と成て。禍をまねく事をしらず。むかし唐土にて。吳王江を渡て狙山に上る。狙ども人を見て散亂して四方へ逃ぬ。其中に一ッの狙有て逃さらず木の枝に飛つたふて鞠をうつすがごとし。をのれが頭をあらはして。人を侮る。吳王矢をつかへて射れば。中にて矢をとる事。物を拾ふがごとし。吳王近臣に命じて。四方より一度に矢を放さしむ。狙千手にあらざれば。悉くとると能はず。終に射殺されたり。をのれ才智に誇て。禍をまねく者。皆かくのごと

鷺烏巧拙

鷺と烏と遊ぶ。烏が云。汝をみるに長き頸あり。何ぞ重寶になるかとおもへば左にはあらず。ふだん頸をちゞめて。さむさうにすくみ居る。とぶ時のつりあいになるばかりとみへたり。脛の長きは。鯱をふむためか。さても無調法なる足もと也。世間に如鷺〳〵といふ諺は汝より始れり。汝世におゐて何の能かある。我は人家に。凶事あれば。往て未然に告しらしむ。然るに人々奇特也とはいはずして。却てからすなきがあしきなどいふて。我を不祥の物として。忌嫌ふ。是ほど心得ぬ事はなしと云。鷺が云。汝人に凶を告るとて。恩にきするも。人の烏なきがあしきとて。いやがるも。共に非也。然れ共。其德なくして。人を正し人の非を告る時は。きく者信せず。却て我をそしれりとして。忌嫌ふは。人の情也。汝の常をみるに。鼠をとらんとて。人家の屋根をむしり。畑に蒔付、植付たる物をつゝきあるく。人の秘藏する樹木の。菓をぬすみ。何なり共人の乾しておく物を。遠慮もなくとり喰て。人ににくまるゝ事のみ也。其なく聲さへ。餘鳥よりもやかましく。人のいやがるは情也。汝の人に凶を告るといふも。其德あり其實有て告るにはあらず。雨氣に感じて青蛙の鳴がごとし。汝の鳴く故に。凶事の來るにもあらず。只汝不祥の氣ある故に。人家に不祥の事あれば汝必其氣に感じて其所へ集り鳴のみ也。是同聲相應じ。同氣相求るもの也。何ぞ是を以て人に恩ありとせんや。人も亦汝を奇特とおもはんや。凡て汝のみにかぎらず。人も亦然り。我に不祥の心ある者はかならず好みて。人の不祥をいふもの也。故に其いふ所は。是なりといへども人是を忌みにくむ我無調法なるは。天性なり。分を越て才覺を用る者は。必禍を招く。諺に鵜のまねする烏は水を飲むといへり。我は只我が分を守りて。一生怠ならむこそ其天性に從ふとはいふべけれと。ぎや〳〵いふて飛さりぬ。

田舍莊子卷上 終

田舍莊子卷中

東住士　佚齋樗山妄選

菜瓜夢魂

東國の鄙に負山といふ者あり。友を訪て隣郷に至り。歸るさに溝川のほとりを過ぐ。比しも七月十六日。月に乘じてそこら吟行するに。何やらん怪しき物流れ來る。取て見れば菜瓜にて馬を作り。索麪を韁として。是や盆中精靈棚に祭り捨たる物なり。形やぶれ。足おれて見るに心戚々たる事あり。負山おもへらく世間皆かくのごとし。きのふは舉て用られしも。今日は棄られて。かへりみる人なし。然るに人はおろかにして。用らるゝ時は威勢をふるひ。傍に人なきがごとくおもひ。棄らるゝ時は怨みいかり。獨胸をこらす。此馬戲物なりといへども。我何ぞ感なからんやといふて。即收めて家に歸り。其腹に書して曰

索麪靶韁麻骨蹄　菜瓜美兮用成驄

昨登蓮葉精靈架　今漂淤泥溝洫中、

又作祭文弔之　八韵

爲爾形丕　一用成驄
以爾質卑　不久見弃
生葉深山　結實僻地
誰得有知　辱亦不至
般蔓圃園　見戈招事
非天非人　自受之轡
前喜後憂　始肥終悴
暫感盛衰　獨灑涕淚

書終つて。菜瓜を枕にして寢たり。夜更菜瓜まくらがみに立て云。其方がいふ所は世間名利の俗事也。我は造化の中に生じて造化の中に遊ぶ。汝等ごとき腐儒の知る所にあらず。天の物を生ずるはそれ〳〵の形によりて。それ〳〵の用所あり。木にては家を作り箱を製し。竹にてはすのこをかき

範をつくり。土には物を蒔植。こねては壁を塗り。其外所々精粗によつて其用をなす者也、我もとより風流珍奇人に賞味せらるゝ物にてもなし。又おさめ蓄へて。世の重寶になるべき物にしもあらず。世間に澤山なる物なればやう〳〵初生の時分にもみ瓜。ぬたあへ。膾(なます)の子さてはなら漬干瓜などになるより外の事なし。まして我がごときのへぼ瓜は精靈の馬に作らるゝ事我等相應の事也。是を以いかめしく。我れ用られたりとて人に伐らんやうもなし。盆まつり仕まひては外に用ゆべき事なし。いらぬ物なれば溝川へ捨らるゝ事。勿論の義なり。是を以我れ辱として何ぞ人を恨みん。我質のいやしきは天なり。人それ〳〵の質によつて用るは分のよろしきなり天をも不怨人をもとがめず。下學して上達するは君子の道なり。我天性畠に生すべき物なり。それを無理に深山幽谷に蔓を生じ。實を結ばむとせば是天にそむくの私也。私を以身を全せんとするは君子の道にあらず。汝みづから才有として世にたかぶり。おのれを以是とし人を以非とす。終に造物者と云ふとをしらず。嗚呼汝小人なるかな。汝がごとき者にあやまつて

國政を執しめば。私智才角を用て。人情を不考。さま〳〵の法を出し。人倦民つかれて。はては亂に及ぶべし。今窮して下に居るは汝の幸也。汝爰を去て學をつとめよや。死生禍福は命なり。造化のなす所豈才覺を以てまぬかるゝ事を得んや。只物を以てをのれを害せず。をのれを以物にほこらず。やむとを得ざるに應じて足るとを知るのみ。

蟇(ひき)之神道

朴齋といふ者あり。此國に靈社有と聞て。詣けるに。薄黑き衣裳したる男拜殿にひれふして。何やらんきち〳〵といふて肝膽を碎きて祈ける。かゝる所に堂の後(うしろ)の方より。しやれがきの木綿ぬのこあらひはがして所々つぎのあたりたるを着したるふとりふくれて見ぐるしきおやぢ來り。彼男に問て云。汝何ものなれば其つらがまへきよろ〳〵として目ずかひよの常ならず。其相をみるに欲ふかき者に似たり。さきより何事を祈るぞといふ。彼男答て云。はづかしや早くも見とがめ給ふ物かな。我は鼠の年經たるもの

也。我天性身輕くして桁梁をわたる事人の陸地をゆくよりもやすし。且强き齒あり故に向ふ所喰やぶらずといふことなし。我がおもふ所へゆかずといふことなし。食物にきらひなければ物として不喰といふことなし。かゝる自由の身なれども猫といふ曲もの。家ごとに飼置故におもひよらず害にあふ。願はくは神明佛陀の威力にて。世界の猫を一度に蹴殺して給はれとの祈也それ猫といふ物世にありて何の重寶もなし。先其心かたましく膳にむかふのさかなを盜み。人の秘藏する飼鳥を喰殺し。圍爐裏の邊へ糞をたれはては猫またといふ物になりて人を害す。禍おほくして益なき物也。我祈る所さして欲深き願にもあらず。身の害を去て給はれとの所願まで也。老人はいかなる人にて何の立願まし〳〵て參詣し給ふぞと云。おやぢ答へていはく我は緣の下の蟇也。我れ世において何の望みもなし。人家に害をなさねば人にくまるゝ事もなく。姿醜ければ人に寵愛せらるゝ事もなし。美食を好まざれば盜喰すべき心もおこらず。雪隱または緣の下に居て。我が手に叶たる小虫を捕て喰。是にて一生事足ぬ。何の望み有てか神にいのらん

汝を害するものなれば猫をにくむはことわり也。しかれどもよくをのれをかへりみよ。汝がいふごとく。猫といふもの世におゐて無益の物也。然れども汝を捕るの藝ある故に。少々盜喰をばゆるして人々是を飼置なり。人々猫を愛するにはあらず。汝をにくむとの甚しきゆへなり。汝猫の世に益なき事を知て。汝が世に害あるとをしらず。小人の心皆かくのごとし。汝天性輕き身にして强き齒を持たらば高き木に上り。堅き木の實を取くらひ食物に嫌なくば野山に澤山なる虫けら。其外人の喰あましてはきだめに捨たる物のみ拾ひて喰はゞ。誰か汝をにくむで。めんどうなる猫を飼者あらんや。汝人なみの齒を持たらば人のふせぐ所へはゆくと能はずして。人に害をなす事もすくなく。人にくまるゝ事も今ほどには有まじ。汝が自慢の齒故にこそ。人も汝をふせぎかねて猫を飼置く汝が居所をさがし求て是をとる也。小人の才は却て身の禍となる事は。汝の齒にてしられたり。汝猫をにくむでならぬ事を神にいのらんよりは。今より心を改めて。人家に害をなすとなくば世界に無益の猫を飼ふ者なく。汝の身を全くする事を得

む。しかしながら汝のみに限らず。人々我身をば慎まずして。人をとがめ力にかなわざる事は神にいのり佛に頼む。小人の常なり。神は非禮を不受とこそきけ。何事も神にさへ祈れば善惡邪正ともに叶ふとおもふ。人の心はおろかなる物なり。夫神明につかふるに道あり。先我私欲妄念をよく去て內を潔齋にする。是を內清淨といふ。扨參詣の日は沐浴し。衣服を改め穢しき物を不喰。身の潔齋を極むる是を外清淨と云。內外清淨にして我が心の誠を以。神明を拜し奉る時。直に我が頭の上に立給ふごとく至誠の感を仰ぐべし。かりにも不敬の心を以すべからず。如此なれば神明至誠の德に感化し奉り。心の私欲妄念消滅し。誠の心興起して。惶々悽々たる中に何となく難有心生す。此心即神明の來迎し給ひて萬善の感ずる所。萬福の應ずる所なり。神道は清淨を貴ぶ。然らば神明につかふまつる者は。神化の助によりて。我心いよ〳〵清淨ならん事をいのるのみ。神は不測の妙用天理の正體也。我心清淨なれば同聲相應じ。同氣相求るの道理にて神明來格し給ふなり。邪欲妄念はけがらはしとて。神明の忌嫌給ふ所也。故に我

が心邪にして私欲のまじはりおほくば。百日百夜祈るとも神明來迎し給ふべき所なし。路を堀切て。人の來らむとを求むるがごとし。猶神道の奧義尋ぬべし。今の神につかふる者を見るに心のけがれを去ることをばつとめずして。借山伏禰宜などいふ者を賴み。金銀財寶を以神に賄ひ身の歡樂をいのり。子孫の繁昌無病長命ならんとを祈る。甚しき者は此願を叶へ給はゞ。何々を寄進し奉るべし。宮社を建立仕べきなどはじめより。直段を極て願をかくる。神明豈彼がいやしき心にならひ。欲にめでて願をかなへ給はんや。是をのれがいやしき欲心を以て。神明をはかるなり。神をけがすの甚しきもの也。即時に罰をあて給はぬは。神明知光の御用捨也。主人などへかくのごとくのたはけを申なば大にいかり給ひ。忽科に行はるべし。むかし某氏といへる國守へ町人願ひ申けるは。御領分の鹽問屋を。私一人に御仰付たまはゞ銀五百枚の運上を出し可申候と望ければ。その國守大にいかり。其町人め我が領分の者に外の鹽をかはせず。をのれ一人高直に賣ならば。我に五百枚の運上を出しても五千枚も利の有事なるべし領分の者

に難義させて。其町人と我と。利をわけてとらん事何事ぞや。さやうの者重ねて出入致さすべからずとのたまへば。取次したる家老用人皆恥入て退ぬと云傳へし。かくれもなき事や。人にさへ正しき主人には邪欲を以てはつかへがたし。況や神は不測の天德有。至誠に感じ給ふのみ。豈私心を以て邪をたすけ給はむや。

古寺幽靈

負山といふ者あり。友を誘ひて。山寺に遊ぶ寺僧一ッの古墳を指して云。是いにしへ何某の墓なり。此人は當時威を東關に振ひ。武を列國に輝かしたる人なり。今は舊墓と成て弔ふ人もなし負山が云。我も聞傳たり。哀かな生前の榮華忽に一場の夢と成り。泉下の枯骨誰か千載の祀を享むや人世の期し難き事すべてかくのごとし即筆を呵し一絶を賦して靈前に薦む

春華開處山如錦　秋葉落時野起塵
人世榮耀渾是夢　古碑猶殘客沾巾

拜していまだおはらざるに墳の後より怪しきものあらはれ出づ。樵夫にもあらず農夫にも見へず髮を被り袂をあけて二人を招て云。汝等何ぞ詩を作て我が神をおどろかすや。汝等生人の情を以て妄りに冥莫の事を議る。大きにちがふたる事也。合點はゆくまじけれ共汝等に語りて聞すべし。我れ存生の內。大國あまた領知して。人にもてはやされ。近國に肩をならぶる者なく。出て外を征する時は金鐵の勇士前後を守護し。向ふ所打やぶらずといふ事なし。入て國に休する時は。才俊辨士。近習に侍公し。古今の事を論じていさぎよく。弦歌の聲は。耳を悅ばしめ。榮色の美は目を悅ばしめ。男女の使令風流の遊戲八珍の滋味一ッとして足らずといふとなく。天下のたのしみことゝくをのれにありとおもへり。今生數つき命終て。形は土となり。心は瓢散す。天を不戴地を不履上に君なく下に臣なし。出て敵國を制するの苦勞もなく。入て民を治むべき心づかひもなし。世の治亂にもあづからず。風流の美惡にもうつされず。物と是非をあらそふ心もなし。天下の至樂を得て悠々として太虛の無に歸す王公の富貴といへども。

共に語るにたらず。何ぞ千載の祀をかへりみんや。何ぞ弔ふ人なき事をうれへんや。負山が云天下の治亂。國の存亡。子孫の榮辱。萬民の困苦にも心なくば。不仁是より甚しきはなし。是を以て至樂とするや。云汝甚惑へり。天下は天下の主あつて任じ。一國は一國の主有て任ず。我が子孫といへども生を隔るの後は我が有にあらず。我れ是をいかむともする事能はず。いかんともする事能はざる所を以て心とする者は愚の至り也。況んや天化の運命は。造物者是をつかさどる國天下の主といへども。造物者の命を受て。是を任ずるなれば。是又造化中の一役人也。永く此國を子孫に傳へて。我が物と思ふは愚也。造物者命を改る時は。力わざにも。腕づくにもならぬ物なり。我一人の身命さへ。造化是を奪ふ時は。辭退もならぬ事也。況や廣き國天下をや。我が子孫といへども我が私の子孫にあらず。造物者の子也。故に生ける其職を盡して。私心なく是を愛し。是をおしへ是を治め。死する時は其歸を安んじて。國も子孫も造物者にかへし。我は隱居して一毫も此に執滯すべからざる者也。造物者我子孫に國を與ふべくんばあたへ。

奪べくんば。奪はむ。其賞罰は造物者に任せ置くもの也。今汝と我と生を隔つ汝等ごときの腐儒我がいふ所を信せじ、只生死存亡の一體なるとを知て此に徹する者默識すべし即一絶を賦して去る、

生前元寂寞　死後自無爲
閑看人間世　榮枯一局棊

蟬蛻至樂

蟬樹上より下りて。其蛻に謂て曰吾と汝ともと一體にして土中にあり。今われ汝を辭して樹上に吟じ。美陰を得て樂しめり。われ汝をにくみて捨つるにあらず。然ども我力汝を如何ともする事能はず。汝さぞな我をうらみん。われ汝の情を察して。每に忸怩たるのみ。蛻が云汝甚だ惑へり。天地の萬物みな命あり。知力の及ぶ所にあらず。其上汝羽翼を生じ。美陰に吟じて樂しむといへども。おもひよらず烏の來て喰はむとを恐る。此樂あれば。かならず此憂ある事世の中の常也。今吾精神氣血ともに汝にゆづり。大

隙をあけて無事に樂むのみ。又何をか求めん。生を好まず死をにくまず。吉凶榮辱みづから知るとなし風に吹るれば風に從てとびあるき風やめば我も又やむ。物とさからふとなし。形やぶれ足折れても痛まず。みづからいとなむ事なければ。天下憂る事なく恐るゝとなし。王公の富貴もかへりみるにたらず。其實は我れなきが故に此苦樂得失のさかひをまぬかれたり。佛の寂滅爲樂といふとも。默して識べし。蟬が云汝は誠に解脫の人なり。我れ露を飲みて世に求めなしといへども。いまだ生物たる人をまぬかれず。願は人世に處する道を聞む。蛻が云我が知る所にあらず。然といへども竊かに聞し事あり。造化我を生じて我れ其中にあそぶ。死生禍福は命也。是を愛しては其心を繫累し。是を恐れては其心を苦しむ其力の不及所をおもひ。其知の不能所を憂る者は愚の至り也。只物とあらそはず。あふ所に安むじて。私意容る事なき時は天下の至樂を得て物のためにやぶらるゝ事なし。生る時は其道を盡し。死する時は其歸を安むずるのみ。何のむづかしき事かあらむ。

貧神夢會

無休齋といふ者あり。身極めて貧也。常に大黑天を信じて。福を祈れどもしるしなし。或夜の夢に。所はいづくともしらず。七福神あつりま給ひ青羅紗黃らしや。猩々皮色の物敷ならべ。金銀の銚子かわらけ。種々の酒肴取調へ。箏三味線唄ひ舞男女の藝者をあつめ。其遊興品々なり。又傍を見ればあさましくやせおとろへ。身にはつゞれを着し。乞食のやうなる者とも。豆腐のかすなどつかみくらひ。羨しさうに凾居たり。其中より五六人列をはなれてとびしさり。岩のはなに腰をかけ清水の流に足をあらひ。股を打て唄ひ。又一節切のやうなる物を取出し。心しづかに吹ならす。其音色ゆふ〳〵として。何を羨む氣しきもなく。却て七福神の遊興よりゆたかに見えたり。無休齋ふしぎにおもひ。そば近く立よりて。御身いか成人なれば。そのさま見くるしくして。歷々七福神の美を盡したる前にて。誰に憚る心もなくゆふ〳〵として興を催し給ふは。おくゆかしさよといふ。彼

男ども答て云。よくも心付給ふ物かな。其心即悟のもと也。何を見ても聞ても心のつかぬ者は。堯舜孔子と相宿しても。道に進むとはなきもの也。我々は貧乏神也。吾何ぞ彼福神にはづる事あらんや。彼と我と皆命也。しかのみならず。彼等は天子公卿大名高家。扨は富有の町人などに親み各々の榮耀をなすといへども。成德の人に親しむとなし。我々は形は如此なりといへども唐土にては巢父許由。孔門にては顏淵。閔子騫。原憲などに親みて箪瓢陋巷を以王公の富貴にも不易の樂を知れり。故に彼等何ほど奢りて錦繡を幕にし。美食を喰ひ。世樂を盡すといへども。藥一束にもおもはぬなり。汝の貧なるは命分也。いかほど大黑を信じ。七福神をいのるとも彼等汝に親しむと能はざる者は。天のゆるさぬ所あれば也。天のゆるさぬ所は。彼等も自由にならぬ事也。汝の小豆飯はくはれ損也。汝に朝夕親しむ者はあれに群居する餓鬼のやうなる貧乏神共也。是等も外より來て。汝にとり付たるにはあらず。汝の生れ出る時に。腹のうちより同道して來る者共なれば。こそげおとしても退く者にあらず。打殺しても死なぬもの也。

是を氣數の命といふ。然れども汝此理を。知て心に徹し。貧窮の中に居てよく其樂をうしなはざれば。彼貧乏神共も。汝と共に樂んで。七福神に恥る事なかるべし。われ〳〵は巢父。許由。顏子。閔子。原憲などゝ親し故に化して今も其樂を不失とて又股を拍して唄ひあそぶ。無休齋驚いて曰。誠に難有御おしへ也。然共我等共樂む所をしらず。願はくは其道をしめし給へ。貧神の云。昔　鷗陽公が曰。天下の至美與至樂不得而。兼者多といへり。何をか至美といふ。身富貴に居て金銀財寶おほく衣食美を盡し。上の恩寵あつく。其權勢盛にして。其欲する所達せずといふとなし。是れ人情の榮とする所にして世間の羨む所なり。何をか至樂といふ。無欲にして足るとをしり。至公無我にして物と是非を爭はず。我心の本然を知りて生死禍福のために惑はず。生は生に任せて其道を盡し。死は死に任せて其歸を安んず。富貴をうらやまず貧賤をいとはず喜怒好惡念をとむるとなく吉凶榮辱其あふ所に從て悠〻として造化の中に遊ぶ者は天下の至樂なり。吾が心を以て天下を抱括す天下を以我が心に得るものなし。富貴福祿は外にあ

るものなり。是を求めて得る事得ざる事あり。かならずとすべからず。至樂は我にあるもの也。心を專らにして是を求むれば。不得といふ事なし。只人迷ひて求めざるのみ。孔子曰仁遠からんや。我仁を欲すれば仁斯に至ると。仁は即至樂なり。求めても不可得物をしひて求むる時は。却てをのれをくるしめ生涯物のためにつかはれて。安んずるとをしらず。名を求むれば名のためにつかはれ。金銀を求むれば金銀のためにつかはれ。器物を求る物は器物のためにつかはれ。色を好む者は色のためにつかはれ。吾が大切の心を以て他の奴僕とする事をしらず。終日此に心を用ひて勞す。今の人は此に巧なる者を智ありといふ。古の人は是を愚者小人と云。此に心を用ゆる時は。至樂と日〻に遠ざかる。わづかに至樂の地を窺ひ知る者は。富貴福祿を求むるに心なし。古へより賢人君子富貴なるは稀なり。たゞ〳〵高位高祿を得る者はみづから求むるにあらず。其人の才德かくれなくして上より擧げ用ひらるゝ故にやむとを不得して受るのみ。然ども小人の心と常に不合故におほくは讒にあふて退けらるゝ者和漢ともに珍らしからず。

退けらるゝといへども。我が至樂においては。一毫も妨けなし。故に此時に當て。富貴福祿を棄るとやぶれたるわらぐつのごとし。富貴福祿よりも重寶なる物。我にあるが故に。富貴福祿。却て身の桎梏となる事を知て與ふれども辭して不受者多し。許由嚴子陵。孔門の顏淵。閔子騫。漆張開の類是なり。

田舍莊子卷中 終

田舍莊子卷下

東住士　佚齋樗山妄選

莊右衛門が傳

猖狂にしてかゝはらず。魯鈍にして可用の才なし。情のまゝに云て。掩事なく好で書を讀めどもはか〳〵敷く文字をだにも記得せず懶惰にして豈も睡がち也。俗人と居る時は。俗人の戲れをなして。樂み其事過ぬれば去てかへりみず。常に椿山の下泥水の上に遊ぶ。姓名を問へば。唐土莊子がおとし種。數代にして日本にわたり。田の間に生れたりとて。みづから田村莊右衛門と名乘る。儒士あり。常に來り訪ふ。一日その友莊右衛門に謂て曰。汝をみるに何者とも名付べきやうなし。口には聖人の道を信ずるがごとくなれども。行ひは子桑が節に慣ふ。罪もおかすほどの惡事もなくもとよりあげていふべき程の善事も見へず。昏〻朦〻として。食を費す。儒にもあらず。佛にもあらず。氣まゝにして。情のこはき者也。世にくたびれ

ものと云類なるべし。たま〳〵筆をとればあらぬたは事を書ちらし。一ッとして實らしき事なし。世を誣人を惑はすの言にあらずといへども。無用の贅言也。汝幸に書をよむ。今より心を改て。聖人の敎に從ひ。程朱の傳を得て。威儀容貌を正し。つとめ行て。人に名をもしらるべし。莊右衛門が云。我聖人の敎の貴きことを知らざるにはあらず。豈人道を外にして。自棄自暴に安んずる者ならむや。且莊子が荒唐の言。子桑が大節を以。聖人に勝れりとおもふにはあらず。只力に强弱あり。才に多少あり。我れ斗筲の一夫。性痴にして。且多病なり。威儀才德兼備たる精微中庸の君子には及ぶべからざる事を知れり。只人欲の爲に性命の固有を取失はず。死生一貫。禍福一致の。心地に至らば。我が幸也。何の暇有てか。言を修め。行を飾て人に知られむ事を求めんや。夫天地の間には。物各感ずる事あり。故に鳥は春を以て囀づり。虫は秋を待て吟ず。吾豈瓦礫ならんや。何ぞよく默して云ふとなからん。世間の是非得失は我が與ふる所にあらず。暫く物に託して。我心の感ずる所を述るのみ。其戲言は。人のわらひをおかす

といへ共。戯言の中に。心をつげば。わが心ざしはしらるべし。

猫之妙術

勝軒といふ劍術者あり。其家に大なる鼠出でゝ白昼にかけまはりける。亭主其間をたてきり。手飼の猫に執らしめんとす。彼鼠進て。猫のつらへ飛びかゝり。喰付ければ。猫聲を立て逃去りぬ。此分にては叶まじとて。それより近邊にて。逸物の名を得たる猫ども。あまた。かりよせ。彼一間へ追入ければ。鼠は床のすみにすまゐ居て猫來ければ飛ひかゝり喰付其けしきすさまじく見へければ猫どもみなしりごみして進まず。亭主腹をたてみづから木刀を提打殺さんと追まはしけれ共手もとよりぬけ出て木刀にあたらず。そこら戸障子からかみなどたゝきやぶれ共鼠は中を飛びて其はやき事電光のうつるがごとし。やゝもすれば亭主のつらへ飛かゝり喰付べき勢ひあり勝軒大あせをながし僕を呼びて云。是より六七町わきに。無類逸物の猫ありと聞く。かりて來れとて則人をつかはし。彼猫をつれよせてみる

に。其形は利口げにもなく。さのみはき〳〵とも見へず。それ共に先ヅ追入て見よとて少戸をあけ。彼猫を入れければ。鼠すくみて動かず。猫何の事もなくのろ〳〵とゆき。引くわへて來りけり。其夜件の猫ども。彼家にあつまり。彼古猫を。座上に請し。何れも前に跪き我〻逸物の名を呼ばれ其道に修練し。鼠とだにいはば。鮴獺なりとも。とりひしがむと。爪を研ぎ能在し處いまだ。かゝる強鼠ある事をしらず。御身何の術を以か。容易く是をしたがへ給ふ。願はくは。惜むとなく。公の妙術を傳へ給へと謹で申ける。古猫笑て云。何れも若き猫達隨分達者に働き給へども。いまだ正道の手筋をきゝ給はざる故に。思ひの外の事にあふて。不覺をとり給ふ。しかしながら。先づ各の修行の程をうけ給らんと云。其中にすゝどき黑猫一疋すゝみ出。我れ鼠をとるの家に生れ。其道に心がけ。七尺の屏風を飛び越ちいさき穴をくゞり。猫子の時より。早わざ輕わざ至らずと云所なし。或は。睡りて表裏をくれ。或は不意におこつて。桁梁を走る鼠といへども。捕損じたる事なし。然るに今日思ひの外成強鼠に出合。一生のおくれをと

り。心外の至りに侍る。古猫の云。吁汝の修むる所は。所作のみ故に。いまだ。ねらう心あるとをまぬかれず。古人の所作を敎ゆるは。其道筋をしらしめんためなり。故に其所作。易簡にして。其中に至理を含めり。後世所作を專として。兎すれば角すると。色〻の事をこしらへ。巧を極め。古人を不足とし。才覺を用ひ。はては所作くらべといふものになり。巧盡ていかむともするとなし。小人の巧を極め。才覺を專とする者。みなかくのごとし。才を心の用なりといへども。道にもとづかず。只巧を專とする時は。僞の端となり。向の才覺却て害に成る事おほし。是を以かへりみ。よく〳〵工夫すべし。又虎毛の大猫一疋まかり出。我おもふに。武術は氣然を貴ぶ。故に氣を練ると久し。今其氣豁達至剛にして。天地に充るがごとし。敵を脚下に蹈み。先ヅ勝て然して後進む。聲に隨ひ。響に應じて。鼠を左右につけ變に應せずといふとなし。所作を用るに心なくして。所作をのづから湧出づ。桁梁を走る鼠は。にらみおとして是をとる。然るに彼强鼠。來るに形なく。往くに跡なし。是いかなるものぞや。古猫の云。汝

の修練する所は。是れ氣の勢に乘じて働くもの也。我に恃む所ありて然り。善の善なるものにあらず。我やぶつて往むとすれば。敵も亦やぶつて來る。又やぶるにやぶれざるものある時はいかん。我れ覆つて。挫がんとすれば。敵も亦覆つて來る。覆ふに覆はれざるものある時はいかむ。豈我のみ剛にして敵みな弱ならんや。豁達至剛にして。天地にみつるがごとく覺るものは。皆氣の象なり。孟子の浩然の氣に似て。實は異也。彼は明を載せて剛健也。此は勢に乘じて剛健なり。故に其用も亦同じからず。江河の常流と。一夜洪水の勢とのごとし。且氣勢に屈せざるものある時はいかん。窮鼠却て猫を嚙むといふとあり。彼は必死に迫て恃む所なし。生を忘れ。欲を忘れ。勝負を必とせず。身を全するの心なし。故に其志金銀のごとし。如此者は豈氣勢を以服すべけんや。又はい毛の少年闌たる猫。しづかに進て云。如仰氣は旺なりといへども象あり。象あるものは微也といへども見つべし。我れ心を錬ること久し。勢をなさず。物と不爭。相和して不戾。彼つよむ時は。和して彼に添。我が術は帷幕を以。礫を受るがごとし。强鼠有と

いへども。我に敵せんとしてよるべき所なし。然るに今日の鼠。勢にも屈せず和にも應ぜず。來往神のごとし。我れいまだ如斯ものを見ず。古猫の云。汝の和といふものは。自然の和にあらず。思て和をなすもの也。敵の鋭氣をはづれむとすれども。わづかに念にわたれば。敵其機を知る。心を容て和すれば。氣濁て惰にちかし。思ひてなす時は自然の感をふさぐ。自然の感をふさく時は妙用何れの所より生ぜんや。只思ふともなく。さるともなく。感に隨て動く時は我れに象なし。象なき時は。天下我れに敵すべきものなし。然りといへ共。各の修むる所。悉く無用の事なりといふにはあらず。道器一貫の義なれば。所作の中に。至理を含めり。氣は一身の用をなすものなり。其氣豁達なる時は。物に應ずると窮りなく。和する時は力を鬪はしめず。金石にあたりても。よく折るゝとなし。然といへども わづかに念慮にいたれば。皆作意とす。道體の自然にあらず。故にむかふもの心服せずして。我に敵するの心あり。我れ何の術をか用ひんや。無心にして。自然に應ずるのみ。然りといへども。道極りなし。我がいふ所を

以。至極とおもふべからず。むかし。我隣郷に猫あり。終日眠り居て。氣勢なし。木にて作りたる猫のごとし。人其鼠をとりたるを見ず。然共彼猫の至る所。近邊に鼠なし。所をかへても然り。我往きて其故を問。彼猫不答。四度問へども。四度不答。不答にはあらず。答る所を不知也。是を以知ぬ。知るものは不言。いふものはしらざるとを。彼猫はをのれを忘れ物を忘れて無物に歸す。神武にして不殺といふとあり。我また彼に及ばざる事遠し。勝軒夢のごとく。此言を聞て。出て古猫を揖して曰。我劍術を修する事久し。いまだ其道を極めず。今宵各の論を聞て。吾が道の極所を得たり。願はくは猶奥儀をしめし給へ。猫云。否。吾は獸なり。鼠は吾が食也。何ぞ人のする所をしらんや。然れ共われ竊に聞し事あり。夫劍術は他人に勝事を務るにあらず。大變に臨て。生死を明にする術也。士たる者。常に此心を養ひ。其術を修せずむばあるべからず。故に先づ。生死の理に徹し。此心偏曲なく。不疑不惑。才覺思慮を用ゆる事なく。心氣和平にして。物なく。潭然として。常ならば。變に應ずると自然なるべし。此心わ

づかに物ある時は狀あり。狀ある時は。敵あり。我あり。相對して角ふ。

如此は變化の妙用自然ならず。我が心先ヅ死地におち入て。靈明を失ふ。何ぞ快く立て明らかに勝負を決せむ。たとひ勝たりとも。めくら勝といふものなり。劍術の本旨にはあらず。無物とて頑空をいふにはあらず。心も

と形なし。物を蓄べからず。僅に蓄る時は。氣も亦其所に倚る。此氣僅に倚る時は融通豁達なると能はず。向ふ所は過にして不向所は不及なり。過る時は勢溢れてとゞむべからず。不及なる時は餒て用をなさず。共に變に應ずべからず。我が所謂無物といふは不蓄不倚敵もなく我もなく物來るに隨て應じて迹なきのみ

易曰無思無爲寂然不動感而遂通於天下之故。

此理を知て劍術を學ぶ者は道にちかし。勝軒云何をか敵なく我なしといふ猫云。我あるが故に敵あり。我なければ敵なし。敵といふは。もと對待の名なり。陰陽水火の類のごとし。凡物形象あるものは。かならず。對するものあり。我が心に象なければ對するものなし。對するものなき時は角ふ

ものなし。是を敵もなく我もなしと云。心と象と共に忘れて。湛然として無事なる時は。和して一也。敵の形をやぶるといへども。我もしらず。不知にはあらず。此に念なく。感のまゝに動くのみ。此心湛然として。無事なる時は。世界は我が世界なり。是非好惡。執滯なきの謂也。皆我が心より。苦樂得失の境界をなす。天地廣しといへども。我心より外に求むべきものなし。古人曰。眼裏有塵三界窄。心頭無事一生寬。眼中わづかに塵沙の入時は。眼ひらく事能はず。元來ものなくして。明らかなる所へ。物を入るゝが故にかくのごとし。此心のたとへなり。又曰。千萬人の敵の中に在て此形は微塵になる共。此心は我が物なり。大敵といへども。是をいかむともするゝと能はず。孔子曰。匹夫不可奪志と。若迷ふ時は。此心却て敵の助となる。我がいふ所此に止る。只自反して。我に求むべし。師は其事を傳へ。其理を曉すのみ。其眞を得るとは我にあり。是を自得と云。以心傳心ともいふべし。教外別傳ともいふべし。教をそむくといふにはあらず。師も傳ふると能はざるをいふなり。只禪學のみにあらず。聖人の心法より藝

術の末に至るまで。自得の所はみな以心傳心なり。教外別傳也。教へといふは。そのをのれに有て。みづから見ると能はざる所を指して知らしむるのみ。師より是を授るにはあらず。教るともやすく。教を聞ともやすし。只をのれにある物を。慥に見付て我がものにすると難し。これを見性といふ。悟とは妄想の夢の悟たるなり。覺といふもおなじ。かわりたる事にはあらず。

田舍莊子卷下 終

田舍莊子附錄

聖廟參詣

或人。北野靈廟へ參籠し。立願して曰。われ君に仕る事。忠直にして私なく。心を盡して役義等も。相勤候へども。讒者のために。立身をおさへられ。轉々として。常に愁をいだき候。傳へ承る此御神は。御在世の時に時平公の讒によつて。筑紫へ左遷せられ。御憤りふかく。神にならせ給ひても。無實の。罪をば救ひ給はんとの。御誓のよし。願はくは我が讒者を退け。我が胸懷を快して給はれと。肝膽を碎て。祈りける。夜更。御燈の影より。白張に。澁紙烏帽子着たる男。出來て彼者に告て曰。吾は天神に事へ申。末社の神なり。汝愚痴なる願ひを申して。遙々此に來らんより。先づ手前の神に。立願し。其上にて。此御神へ參詣せば。其時神威あるべし其分にてはならぬとて社壇のかたへ歸らんとす。彼男袂を引とゞめ。我が屋敷には。御社もなし。只今より勸請仕べしやといふ。末社の曰。神は靈

明の體なり。靈明の體有て。然して後に。不測の妙あり。神は人心の誠に感じ給ふ。私を以欺くべからず。邪を以汚すべからず。故に神前に鏡をかけて。其靈明をしめし。來る者の。邪正此鏡にうつらずいふ事なし。汝の心體にも。小分ながら鏡有り。此鏡あるを以。是を人といふ。神明に通ずる者は。此鏡ある故也。汝常に意欲の袋かぶせて。ひらくとなし。此袋を去り。妄想の塵を拂はゞ。彼鏡明らかなるべし。鏡明かなる時は。よく命を知るべし。汝が立身せぬは命也。命を知る時は。天下怨る所なく。胸懷をのづから快然として。神の御心をも知るべし。天神は命に安むじ給ふ。汝等がいふところのごとく。愚痴なる御神にはあらず。當社の御謂れあら汝に語りてきかすべし。世人聖廟の御事をいひ傳へて。配所に御座の時。讒謫の御憾散せず。みづから告文を書。竿の頭に括り付。屋上に登りて。天に訴へ給ひ。死して梵天の許をかふぶり。雷と成て。禁中に祟りをなし給ふと。書にもあらはせり。故に天神の尊像を作る者は。すさまじく齒がみをして。怨り給ふ勢をあらはし。給にかくも亦然り。是至誠の神德

をしらずして。をのれが愚痴の私心を以。神の御心をはかり。人を惑はし神をけがす。其本は佛者の奇異を談ずるより出たり。夫私の譽を報んと欲して。胸を焦し。天に訴る者は。一向に命を知らざる。凡俗さては婦人。愚痴の僧法師などのする所也。今の時といへども少し。道といふ名を知りたる者は。常人も如斯事はみづから恥て不爲所也。況んや菅公の忠誠。天地を感動するほどの。神德。天下不知者なし。何ぞ配所にて俄に。愚痴になり給はんや。古き書をみるに。配所に在る事三年。一室を出給はず。都府樓前にあれども。終に登りて觀覽し給はず。觀音寺近けれ共。往て遊び給ふとなし。只君の御悶を重むじ。みづから敬給ふとあり。配所に御座の時

仲秋の詩に

去年今夜侍清涼　秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣今在此　捧持毎日拜餘香

此詩を見れば。配所に在ても。君を忘れ給はざる忠誠言外にあらはる。其

外の詩歌にも。一言も君を怨み讒者を問ひ給ふ詞を不聞。又菅公生時の忠誠は。天下の人心を感動し給ふ所也。若し世に云傳ふる所のごとくなる御心ならば。豈天下の人情。是を尊慕し奉るとあらんや。又菅公筑紫に謫せられ給ふは。延喜元年辛酉の歳也。配所にて薨じ給ふは。同三年癸亥の歳也。時平が病死は。同九年己巳の歳也。清涼殿に雷の降たるは延長八年庚寅の歳也。菅公薨し給ふ歳より。二十八年め也。一念の惡鬼何の隙有て。二十八年の久しきを待んや。其讒者の張本時平は二十二年以前に病死せり又八年以前に、天皇既に御過を悔給ひて。菅公左遷の宣旨を。燒捨本官に復し。正二位を贈り給ふ。何の怨を殘してか禁中へ祟りをなし給はむや。又清貫希世を殺さむためばかりならば。彼等が宿所へ降て。つかみ殺し給ふべし。何ぞ禁中を駭かし給はんや。夫暴風雷雨は陰陽の變なり。其氣散ずればやむもの也。此雷雨は。天下の人情を以。天地を動したる雷雨なれば怪したる事も有べし。陰陽の變化は。僧法師の知る所にあらず。止む時節に祈りあわせたる坊主。我が法力をいはむとて。種々の奇怪を取付たる物

なるべし。佛者の奇談は。珍らしからぬ事也。菅公生時の忠誠仁德は。天下の人の仰ぎ望む所也。然るに罪なくして。配所に薨じ給ふ事。天下の人情驚歎して。安むせず。天下の人情を以。天地の氣を感動す。天地の變災ある所以なり。故に延喜十年大旱。同十三年大風。同十四年正月洛中火炎同年夏洪水。翌年七月日輪光をうしなふ。同十六年洪水。鴨川の水溢れ出づ。同十七年夏大旱。洛中井地涸。同二十年夏大旱。翌年太子保明時平嫡也薨じ給ふ。天皇惧れ給ひて。年號を延長と改め。菅公左遷の宣旨を燒捨。正二位を贈給ふ。然れ共人情猶惧れて安むせず。故に天災不止延長三年又旱魃し。同七年大水。同八年庚寅の年。雷清涼殿に降。是天下の人情の安むせざる所より。天地を感動する所にして。菅公の靈。與り知り給ふ所にあらず。天下の人情おそれて。かくのごとく。安むせず。況や時平が惡に與したる族は。みづから其惡氣を以。天の惡氣をむかへ。心を驚。恐死した る事宜也。是に依て。人情奇怪を談じて。益々恐異す。左傳に載る所の伯有が厲の類にはあらず。伯有は凡人也。菅公と日を同して語るべからず。

又叡山の尊意法師の坊へ。菅公の靈來り給ひ。我れ梵天帝釋のゆるしをかうふり。禁中に入て仇を報ぜんと欲す。かならず法力を以。防ぎ給ふなといへり。尊意不肯。菅公忿て柘榴を執て口に含み。妻戸に吐かけ給へば妻戸燃上りしを尊意瀉水の印を以消たり。其妻戸の燒痕。今に殘りて有りと云傳へたり是尊意の法力の奇妙をかたらんため。後人の僞作也。總じて僧法師は。如斯僞作。珍らしからず。若し實に左樣の者來りたり。といはゞ是狐狸天狗などの妖怪か。又尊意が心魔なるべし。心魔の事は禪家の書におほく載す。凡て慢心の僧をば。狐狸天狗の類常に窺ひ。誑かすと云り。尊意は後に天狗に成たりと云傳へたり。上州に跡あり。尊意もし大德の僧ならば。如斯ものゝ來るべからず。たとひ來りて如斯事あり共。みづから恥て其跡を繕ひ。かくすべし。人に語る事は有べからず。我が法力の名聞に。其燒け殘りの妻戸を。秘藏して証とするほどの。凡心ならば。法力にて飛ぶ鳥をいのりおとして。喰れたり共。貴からず僧天狗になりたる事。古書におほく記す。又禪錄には。坐禪の前に。希異なる事を現ずるは。皆

我が心の魔也。外より來るにあらず。たとひ佛菩薩來現すといふ共。皆妄想なりといへり。道に志ある僧は。如斯奇異なる事あれば。我が不德なる事を恥て。實を以てつたへて。人に妖怪なる事をしめさず。僞て人を欺く事なし。凡僧は。少にても奇異なるとあれば。それに種々增補して。僞を取り付我が法力の妙なりと云て。人に譽れを求む。我が心の妖怪なる事を知らず。人を欺くのみ。

禪の書に記す。昔禪師あり。山中に坐す。いづく共なく。孝子一ッの屍を擎來り。禪師に向て。哭して曰。禪師何故に。我が母を殺し給ふやと。禪師見て。即是魔なる事を知て。斧を取て。彼孝子を斬る。孝子走り去る。其後我が股のみ濕たる事を覺ゆ。すなはち見れば。血流る。みづから我が股を斬ることを知らず。此れ禪師坐禪する時。心中に見を起す故に。外魔遂に感じて禪師の心に入り來る。是れ自心よりすることをしらずといへり。此禪師みづから其股を斬るといへども。みづから其魔なることを知る。愚味の僧は迷て我が心に誑かされ。或は奇異の事に着して直に魔界に入る。魔は

迷心より生するとをしらず。行法の奇特なりと思ひて。慢心生じ。天狗になる事も有べし。正法に無奇特とは。空海の詞也。然らば空海其大意は知るといへども。我は奇特をなして。人を欺くか。又後人附會して。空海を泉下に泣しむるか。

朱雀院天慶五年。本寺の僧。日藏といふ者。死して十三日にして蘇生し。朝廷に奏して云。吾れ此間頓死して。地獄に入鐵窟の中にして。延喜帝に逢ひ奉りたり。帝我を招きて宣く。彼大政天神。怨心を以。日本に祟りをなし。おほく佛寺を燒き。有情を害す。然れ共彼は。宿世の善行によつて大威德天神と成し故に。彼が造る所の罪報皆われ是を受く。是によつて。我れ苦を受る事無量なり。汝本國にかへり。帝に奏して。一萬の卒都婆を立。我が苦患を助よと。勅諚いまだおはらざるに。牛頭馬頭の鬼ども。延喜帝を左右より引はり。地獄へつれてゆき候と。誠しやかに申上る。天子彼の妖僧が妄言を信じ給ひ。即一萬の卒都婆を造立し。諸寺に仰せて。法華經を轉讀せらる。日藏が妖言世に傳へ書にもあらはし。勿體なくも。延

喜帝の御姿を寫し。獄卒の呵責する所を。双紙の繪にも書あらはし。人形にも作て。憚なくあやつり。等にも仕組事。千載の後といへども。見るに忍がたく。あさましき事なり。僧法師の妖言は。めづらしからぬならいといへども。日藏がごとき者は。をのれ一人の渡世のために。朝廷を欺くのみならず。惡を末世に傳へて。後の愚人をして。かくのごとく禽獸の業をなさしむる事。天罰ゆるす所なき者なり。嗚呼。天下文明の時に出。かゝる妖言を云出したらむには。車ざきにも行はるべき事なるに。殘念なる事也。忝も我國の天子の御姿を。天竺の佛法流布のためにとて。かくのごとくあさましく。繪にも寫し。木に刻み。浮世の人の耳目にさらし。あらぬ妄言を誠しやかに書に記する事。人の心あるもの。是を見るに忍んや。其本は朱雀院の御迷心にて。彼僧を斬罪し給はざるより起つて。父祖の御恥を後世に傳へ給ふ。歎かしき事也と。懇(ねんごろ)に語りければ。彼男涙をながし。聖天子といはれさせ給ふ。延喜帝も。數にもたらぬ坊主の。妖言にて死後に如此の惡名を得給ふ。當社の御神も彼妖僧の妄言より。神にならせ給ひ

ても。猶忠誠の神德を。いひ消され給ふ事。實に命也。我等わづかに立身をおさへられたるを。爵懷すべき事にあらず。今よりおもひ出しもすべからずとて。開悟して歸けるが。立かへり末社に問て云。僧の天狗になるといふ事。實にてかや。末社曰。天狗といふ者は。日本にのみ有て。異國書にみへず。惟に山神魍魎の類ならん。定る形有り共見へず。人の天狗になるといふも。此理あるまじきともいはれず。異國の人。丹藥を服し山に入り氣を錬り。其術を修して仙と成る者あり。既に仙となる時は。換骨の術有て。氣體ともに。變化するとみへたり。體の氣に依て動き。氣は心の向ふ所にしたがふ。故に心變ずれば。氣變じ。氣變ずれば。體變ずるの理も有べし。然らば。高慢偏氣の精靈其勢ひ甚しく。天狗になる事有まじき共いひがたし。其姿。繪に畫たる者を。皆山伏に背の生じたるもの也。其姿を見とめたる者有か。知るべからず。今社頭にある所の。王の鼻といふものは別也。神代の。猿田彦の命の假面也。此命。諸神のさき拂ひをし給ふといへり。色赤く鼻高き命とみへたり。又例の佛者。附會して。佛神守護の惡魔ばらひなど云て。猿田彦の命の面と。天狗の面と。混じたるなるべし。命大きにめいわく也。

鳩之發明

雉と。鳩と。遊ぶ。雉が云。我心を用ゆること怠らず。常に耳を傾て。物音を聞き。人影を見ては。叢にかくれ。人に我が有かをしらるゝことなし人氣なき所を窺て。未明に出て餌を求む。是程に用心してさへ。やゝもすれば。かひ付けにだまされて。打あみにて。とらるゝものおほし。汝は少したらぬ生れ付にて。何の用心もなく。人居。屋敷まで遠慮なく行て少〻廣き所にては。庭木の枝にもとまり居て。ゆだんさうに。てゝつぽゝうといふて。誰をよぶともしれず。せめて。小聲になり共呼べかし。身をしらぬ。たわけもの。山に木はなきか。里へ出ねば。ならぬかといふ。鳩の云我れ性拙しといへども。身をしらぬほどの事もなし。人の肩へとまりて手捕まへにあふたる事もなし。人が來れば飛去ほどの事は。我も知たり。然

れ共山に入たればとて。人のゆるすべきか。大海の底にある物さへ。あまを入れてとるは。人の知恵也。何方に居たればとて。命數來れば。遁るゝ所なきは。死の道也。若くて死ぬも有り。腰膝もたたず。居立もならぬまで。生はだかりて。人のやつかひになる者もあり。分別も。才覺も。いはぬものは。造化の命也。生死は形ある物の常なり。人なみなれば恨もなし我も亦。造化の中の一物なり。天何ぞ我一人を愛して。私の禍をなさんや。

天神の御歌とて世に稱する

心だに誠の道にかなひなば
いのらずとても神やまもらん。

是ほど結構なる御歌はなし。汝は命をしらず人なみにはづれて。生をおしみ死をいたゝ功を盡して用心する故に。片時もやすき心なし。少しの地震にもおどろき騷ぎうろたへて大きなこゝを立る故に常にはかくしても人にありかをしらるゝ也。汝それほど愚痴にては常に物を恐れて生たる心地は有まじ其苦しみをせむよりは生死の命に任せて世間廣く飛びあるき悠〻と

して生涯を終らむこそましならめ汝は我を拙し我は汝を愚痴なりとおもふなり。むかし愚痴にして物いまひする人あり。ある禪僧責て云けるは貴方は武士にて。刃物を腰にはさみ。生死を常にする職分にてはなきか。然るに貴方一人それ程人にすぐれて。身を大事に思ひ給ふか。物いまひと云も。畢竟死ぬをいやがる心より出たる物也。我が職分をかへりみ給へといはれ。此一句に恥て。夫より此男。物いまひやみたりと云り。總じて物いまひする家には怪事多し。實は怪事にはあらず。常の者なれば。氣もつかず。見付もせぬ事也。不斷心に迎る故に。さしてもなき事を見出し聞出しは怪事なりとて。山伏よ。八卦置よとて。さわぐ程に。是は釜の神祟りは臼の神のとがめなどいへば。夫祈念よ。佛よとて。坊主山伏を呼び集め。祈りはたく是に效て下〻をも種〻の事を云故に。常住屋內。騷がしき物也。又此虛に乘じて。狐狸もなぶる物也。一切の事。皆我が心より迎て獨苦しむ事を知らず禪家にいへる事有元來地獄なし衆生みづから地獄を作て。我と此に墮在すと。汝が地震にさわぎうろたゆるも此類なり。

田舍莊子附錄

畢

浮世莊子講話

不許複製

明治四十四年四月二十日印刷
明治四十四年四月二十三日發行

《定價 金七十五錢》

著作者 忽滑谷快天

發行者 東京市日本橋區榊正町壹番地 服部國太郎

印刷者 東京市京橋區日吉町十番地 渡邊爲藏

印刷所 東京市京橋區日吉町十番地 民友社印刷部

發行所 東京市日本橋區榊正町壹番地 服部書店

賣捌所

東京市日本橋角 大倉書店
大阪市北區東梅田町 盛文館
大阪市東區北渡邊町 杉本書店
名古屋市玉屋町弐丁目 小澤百架堂
京都市佛光寺通烏丸東入 東枝律書房
宇都宮市鐵砲町 煥乎堂分舗

慶應義塾大學講師
曹洞宗大學講師　忽滑谷快天氏著

樂天生活の妙味

第五版

洋裝菊判　全一册
正價金七十五錢送料金八錢

著者曾に禪學批判論、禪學講話、禪の妙味等を著すや世人渇に飲を得たる如く擧つて是に趨き、爲に何れも數十版を重ねて讀書界を風靡したりき、然るに今又本書を著し以て逆境に在る者の爲に說かる、即ち◉貧中の妙趣◉病中の妙趣◉不幸中の妙趣◉逆境の妙趣◉不如意の妙趣◉害惡の妙趣◉死滅の妙趣◉是也前後七章何れも先生が過去の經歷より出で句々心血の凝結せし所、引例古今東西に涉りて豐富、行文平易流暢にして趣味津々通讀兩三回にして大悟するの感あるべし

忽滑谷快天氏著

宇宙美觀

洋裝天金函入
頗美本全一册
正價一圓五十錢
送料十二錢

本書の內容は著者が天眞獨語の樂天的人生觀を基礎としたる文藝論●敎育論●道德論●宗敎論●人生論●等にして眞善美の離合物心の一異道德宗敎の本末宇宙人生の始終等の大問題を平易簡明に說述したる者にして著者が初めて學に志し人生問題に想到してより樂天生活の妙味を感得するに至る迄三十年間の思想史たり

第四版

參禪錄

妙心寺派管長 豐田毒湛師題詞
南禪寺派管長 河野霧海師題詞
京都帝國大學理科大學教授 理學博士近重眞證氏著

三千の痛棒與慶に徹困なりと雖も他の饒舌に因らずんば爭奈でか上座の障緣を排せん。著者一箇眼夙に作家の爐鞴に入る。一枝の靈筆巧に禪要を講說し剖析剔抉些の餘蘊なし。所謂一氣鐵牛を呵し蚊嘴も亦之を下すに容易ならしむる者が特に其論據を日新の科學に取り以て現代人文と接觸する所以を明にせるが如きは則ち著者苦心の存する所にして前人未發の見蓋亦尠しとせず。世の參禪に志ある士乞ふ必ず一本を購ひ以て座右の友とせられよ

洋裝全一冊
正價金六十錢／送料金六錢

森大狂居士著

禪學一夕話

第二版

洋裝全一冊
正價金七十錢　送料金八錢

專心求法の者は固より讀め、節を磨かん者は讀め、功を立てん者は讀め、而も亦大に名を求めん者は讀め、大に利を射らん者は讀め、名を忘れて名を得、利を離れて利を得、只大を望まん者は凡て來れ、禪林の梢に咲き誇れる百花の爛漫は收めて此一書に在り、才子佳人高僧烈士と眩目する迄に多かれと一心萬法を藏す、鬼佛本と一如、それを操つる絲心は只各自の見性に待つ、快利なる此文字に參し一向其見性を得よ。

865
179

2

385

335
179

019343-000-6

335-179

浮世荘子講話

忽滑谷　快天／著

M44. 4

ABG-0029